



藍

虎

三  
帝

十

1 曾 5
508
40





45  
508  
40



志月一三卷之十  
 或同後醍醐帝皇后礼成院後系稱院の再号  
 あり何れも曰曰死と稱され帝臨終一御近幸此  
 院にて後光嚴院と云く御門とせしは后位と  
 下し御門とせ禮成院の号と稱され帝還幸  
 の後院号と云りて中交後一崩後又後系稱院と  
 追号しありたり乃号あり  
 ○原系稱也平虎胤文八下徳寺の系稱也  
 也友胤少弓所合戦の以甲列一武同信虎又仁  
 一弟徳寺も甲列一仁一系名あり此小信虎諱の字  
 と稱け虎胤と稱せし後系列の小系仁一



○岩津村伝光の寺ハ派勤山と号す百八云妙心寺ハ法性山と号し妙心院殿ハ寛正二年十月朔日題を百一云云斗乃ち派あり

○二村山法系寺ハ十三云

○妙心寺村ハ是乃字ちとハ云々是曹洞派下の古刹也珠山龍海院の寺と云云法原云ハ寺ハ是の字を

以て云々ハ海ハ日月の下の人と相せしむのハハ天下成知りハ云々ハ浄瑠璃と云々ハ云々

酒井一黨ハ善提所なり

○本郷村光仲寺ハ一云云廣忠云ハ別後松平右衛門忠政の寺也

○先代村勝蓮寺ハ一云云徳河と園東より南云ハ院ハ入りの附志ハ云々ハ休止ありと云云

○大樹寺支院ハ在院ハ道軒云ハ妙心寺大石陽之

○大原村名云ハ云々ハ信忠云ハ此院在云云とせし

○東郷村云々寺ハ松平云々寺ハ此寺あり

凡三列寺院古跡云々ハ多ハ今ハ當院ハ此寺也

長流七堂と云ハありハ留上由此村長流寺母地村ハ堂云ハ云々ハ乃云々ハ雲々の賊也云ハ風也云ハ阿弥陀寺云ハ云々ハ云々

○伊賀八幡社ハ七百云ありハ六百ハ社ハ初松平郷云

親氏公奥列御成儀の付垣竈六所御祈の祈あり御  
家門再興ありし後凡松平氏御成儀六所御祈と祀り  
あり大神君の御付松平より此地より遷在る社と建か  
りて下り御成儀御成儀の御成儀と御成儀と御成儀  
あり社屋百六十二云七斗五斗乃れ青蓮院御門  
を此御成儀より九月十日の御成儀の御成儀と御成儀  
也房塚とあり故よりあり

○一之文砥麻神社文武帝代時草麻砥公宣勅と奉て  
創建次御成儀と草麻砥氏之御成儀五月御成儀  
十六あり凡の御成儀の御成儀ハその少坂井村あり  
ありとあり末御成儀の後ハ村八剣社と云

○下和國村ニ尾大蛇神 四十六名の寺屋ハ本多大久保  
中根の三氏御成儀と云々

下和國村ニ首大蛇神の祠あり傳云和國氏末御成儀  
一付地也乃大蛇と云吾等とより凡御成儀  
洞の大蛇蛇と云とあり凡和國氏目と云  
と云ありとありとありとありとありとありとあり  
とあり悔て尾大蛇と云一あり祠と云一祀り  
祠と云大寺御成儀と一祀ありかありありと云  
我成下古后村大寺御成儀と云同と云あり

- 三別名凡十二家
- 松平右系      松平左系      松平彦官系      松平何官系
- 松平右系      松平彦官系      松平裁守系      松平甚官系

小野浅三郎 近坂多助 矢部藏助 山田右左衛門

伊地一家 山下源助 林源八郎

○若尾村ハ跡あり跡といふ者に福り一とくや

○杉山村ハ柳松といふ者あり年々柳乃正しく生むる

他亦よはるるあり

○中山岩戸村ハ三蓋松といふ者あり 天徳院 寺殿 天徳氏幕

の紋とせしは事と云傳へたり

○窪内村ハ万歳松を以て毎年東郷より正月十日に沙

部定所凡そて万歳と勤り合ふ所存は其以前ハ浅

葉河松にして勤葉十五俵福りしといふ

○凡そ河ハ我々室河平貴の玉なれざるなり

○是を知りて是より事なり 跡ハ家統遠祖遠利

より中山岩戸より移り住して杉平人なせしは

是中居の地はいつかぬハ中山岩戸ハ家田那江

て是處より二里斗之七々の間岩戸村ハ天野村と

名を負 正教寺の如也 の形代之 所斗天徳松を是之 岩戸山正教寺天野

院 御草紙 津古宗 天徳松なる正家所建開山ハ善正上人 正家

天乃岩戸 三蓋にあり 若丸社名望寺院あり

○當有憂國之心不當有憂國之語といふ古語を痛く

是を以てふより言責なる事として王政乃

是を以ていふを懐多きものなる忠臣の言ふをむけり

○本乃平を佐助とせしはあいつかゝるる人と如し

りふは是ハ悪人の院の源伝よあるがよして心境よりまを  
轉し去ル事といひりされハ孟母の三遷居をまをといひ  
し事ハ深やまをたとりありありしを付和場名門よ入之  
れし人のこれまをたとりし事ハ斗筭の縁をま  
たして計謀をある庸人と交括して独を操りて  
まをたとり大夫の漢よありし事ハ

○八幡山よ高良明神二所ありし事ハ武内宿禰あり  
と云ハ非り二十二社源式肩書に石清水別当澄法上  
高良ハ武内下り高良ハ玉垂也云師時記曰江師  
高良大明神者武内也非也高良者藤大臣連保  
也神号曰高良玉垂命以于満兩顆令奉行之故奉

号玉垂云々

○三上刑部少輔乍属干義治令隱謀與敵欲討  
之婢逆令承知其意趣相謀干舟田十郎安經去  
月十三日於安經之宮令梟首三上兄弟之條委細  
令達畢誠無二之忠義其感殊多可論賞其  
功勿論也先附告達之脚カ感賞之狀如件

與国九年十月三日

義助判

天野備中守

山内二郎入道

間嶋四郎三郎

右古感状平家に於て伯中名を經改



肥後国住人野本次郎宗光宮上彦六頼次偽而属于  
義治之後令隱謀通路之上密知之今晚一人宛被  
討取之條神妙之至誠其感不斜候追而可賞其  
功者也

貞和元年十一月五日

義助判

畑八郎多

大沢彦五郎多

右古感水府下太保氏義助  
按、凡是後村之院即位の元年以時刑部令義助  
吾野よりあり園太曆神明鏡櫻を記号南方の事と  
詳しせしむ八所考ふ一左平記も亦古来二十二卷

關如、是年考ふに由る一右二通感書同筆蓋  
一是義助自判筆也

○延元三年丙寅 北朝曆應 元年 閏七月二日在追濱中將義助

致弟足利より一節に死しぬ 元弘日記 義書 八月 七月十一日と云ふ也 刑部

令義助敗軍乃士と集り致弟辱れぬ 八月

十六日後醍醐天皇崩及是報よつて後村之院義

助又綸旨と敵下されて曰遺勅異他之上義助例

易官軍恩賞以下事宜相計（子也）官下（子也）如よ

詔氏の右賞と括せしめしむ

義助延元元年九月致弟より逃れ瀧刺根尾城より

挿り逃り尾根城より多勢羽足海より次て海と磨

て吾邦少帝に帝を勲功以磨一級と加て從  
 已位下に叙せり十月三日後村之院即位身國元  
 年と号に二年日月に勅とけり此九州の管廣  
 使とけり豫州府より五月有府て幸す

朝氏

新田二弟太弟  
 贈從二位鎮府  
 將軍義重六  
 世新田太弟基氏  
 男

義貞

左中將

義頭

數後守

義助

刑部卿

義貞

左兵衛佐

義宗

左少將

義治

左衛門佐

義陸

相掇守

貞氏

横瀬新六郎  
 由良祖也

此外義頭之裔越前堀江等

○豊後國宇佐郡遠田村耆耇屋山羅漢寺石像の五百羅  
 漢ハ逆流建順といふ俗造れとす也  
 ○豊後國速見郡市綿布山ハ湯湯涌出の山にして常  
 に烟を吐敷里に足白古俗の古歌よ  
 豊後乃市綿布此嶽富士小似て煙を吐くといふ歌あり  
 右延喜神名式ハ所載火男大賣神社二座といふ是なる

麓一は山の麓に多く勢満涌りて流を海にあり  
ありく河に凡食物を潤きりし大概は大氣を熱  
せしむ又の礫を割裂し硫黄を臺にりとる民  
家ありとあり世より百合若尾別荘の祠ありと河  
りといふ之回玉六郷山二十八所とて首仁尊菩薩と不  
僧開基せし寺多し今ハ荒廢しけふも河にあり  
之中に峨嵋山文殊仙ちハ彼小角中興せし附白犬の  
跡ありて文殊を感地せし故事とて小角の像  
形あり丸形を多くけ寺及是引山両子寺長岩屋  
山天龍寺ありと望天台家門を修正法とて  
毎年二月七日の夜鬼舎あり龍息燒息災拂息

しとの流とハ寺僧はりて遊ハ侍るとあり

○肥前國杵浦郡の海中 平戸の二十里に なる流山を神  
嶋と号す河流又在り神社と神名帳にありとあり  
平戸南乃嶋とて流の神社あり尚又平戸嶋の  
内法法七事大権現といふ祠ありと此二社とも同流  
とあり 神嶋とてハ流と七事とを祀  
とて流と七事配河 是一類の神なりとあり  
河流ハ名神大社 七事ハ福宗新系其他の神  
七事大元徳神并ありとあり  
○筑前玉觀世尊寺ハ今徹にあり且箱崎の三流  
有居に敵國隠伏と寺願あり筑後玉臨瀧河系  
開基禪河の住せし善導寺今もいふく是の傳りといふ  
由増院十二院詠びまるとあり



基とてあり皇陽の日還在ありしむ帝升る踊と

の淫樂を法清人及紅夷等に三次紅夷ハハ中九

山皇遊女教十人家初に流して優舞を極すとてや

或人曰車此丈八系小八系の葉の字根本八曜乃字に

して九曜の紋ある故名なりと識者いふよりまも

る之も母や九曜と稱せずして八曜といふ八何ぞや

新撰古今に佛眼曼荼羅ハ七曜ト云見是をとかハ  
八曜ト云蓋そはゆふ二一ノ字誤とあるは言てまも 竹うらと

○冠の老掛を名義と何のゆゑすまゝの未詳或人

云是覆掛の者も毎年迄にすし出してたて成る

半の徳をさるとありしと海よりせぬおほりといふ

説也何と云ふ由夫老掛といふと志也其也

又昔しと故と是と何とて物ありは覆掛の言と何と

ハこれと續古々神祇の教祇部成茂此云

楊花老のりやと何とて神のいりきにやと何と

はふハ楊とて何とて老と何とて人といふり細れハあハ

りけハ老かくし流轉流と云ふ由於楊とて又よとて

あり所會つとぬるととて

○中流那海那那又ハ古云此の寺院多かりし中流

那奥田村安養寺十八坊今荒中流村備前寺十二

坊七寺村長福寺七坊益田村東原寺六坊今細院

以外矣合村玉分寺今絶て曰法善寺村玉分寺

今絶て曰大塚村性海寺長野村弟徳寺日中村長光寺

今六前此之  
後世移今地

一某村地多古多海部郡た高岡寺今も

十一坊

一院ハ天台新屋村法性寺

今二院蜂須賀村蓮花寺ホ

乃外函館省の岡嶋に之より安國寺了以寺ホ今も

りたりす是皆顯密の名匠なり一寺ありて昔の内

今而と海一古あり一地後世盛ん成板寺社のとも

何しすあて人の世のそる古今同一か

○其のころ或人の家に

花多流りまきはり正村の香司とりまむ其香と

さしきまは梁を繋いでくさなけりまをよしく吹を

れハ天下の句事たひ作るとや喜の事物花多に

能くあふ小の外りまの事ありあはれをま

あとも是をそとまはれ人他れ一又北野能育の家に

馬車と地より移してあるまのされあまやを船の管

是ハまが師のあまやありあはれ作る詩も亦是一

傳者の詩あり詩人乃法多新氏の詩あり庸信忠侍

ありあまを人まをけりまかきまや作らる

○密家流傳同三面六臂大黒天神を軍陣とす

大日經 降杯を二臂の者ハ具福成初るといりまに大日流教

令輪牙なり

○出る口曠呵哩帝母といふ二鬼之曠呵ハ乾達婆なり

呵哩ハ密子曲流事にして如意輪觀音乃所寢及と云

故也其痛の交侍事ハ密子曲とまら事ありと云

○日蓮と大蓮明院と号を日比は村定徳寺院免簿に  
く記せり布に八尾及び竹々等あり彼等此開基の日時と  
し信憑ある二年八月二日に死すと云り

○或同日蓮黨の門徒より二十番神あり蓋神呪とくくあり蓋神  
とは天台宗山王の中有神と云てあると云同月然  
ハ兼主神との二并小多聞物小及子母神と加てあり  
神呪ありとあり是亦神ありあるは法又同其云  
日新明神の像とありあり何神を予同圖の右と東  
市の像とあり神と云 天世神社 天上の丹生の神下流  
右の岩字下の丸に比の神像云 天女の像あり  
比の神社ハ也新少遊りありあり故より信人階に天

依云獅子  
狗大の半

階下黒白の二犬ありこれ將傷の神と云  
空海と引入して雲山と云神と云丸神の像多くハ  
空海より説くや大際と云あり王宮又人皇御衣  
玉鳳ありぬき多り也

○時ハ卯月のもろろや大樹皇由免より此臨守  
東照大権現の御社の由遠近の地川あり海へ人群  
とらせとせの御といはくともあるは白鹿といふ  
ありありとせられちとせの御る皇君と云く皇女  
内又又天龍宮といふ御一宮又また下れりりまこ  
とに御代皇ありともありありと云神の御御文と  
岩とせありありと云一延喜乃御代白鶴の御徳と





府下の内事存一今案をいひてはありて事の内  
多かりし部波東部を結し驕りて西へ北をさしぬ  
人形まて立しぬ收付を離れしは源氏物語よあれ  
久しきありていふ事あるは色よ必きり事とて如く  
知也事ありていふ事ありて或曰離を元来後の紙人  
形より起り身の内乃余風はくよこの後よて月人  
信るとす曰古離と水は流し信るとすの如くに  
も是より信れと信物とすありて男女は像とありて  
考ゆれば是より一幸の神ありて一夫婦忠孝成  
造見也此ありて一杖束畧記ありて信りて此孝流  
と案よりいふ事ありて未だ禮なり幸ありて人子成神  
と案よりいふ事ありて離ありて人の調度なりと云ふは  
と云ふはけりていふ事ありて驕りて流れ根なりて  
と云ふは

○府下性高院は武利西村よりきて大雄山正覚寺と  
号せし清養上人忠吉御に遭過せしは慶長年中  
甲州清沢へ移されし卿の御母宝皇院一品大夫人  
乃香火の場小なりて一白の地と号ししは  
卿薨後御院号改稱ししは信長院と号せしは慶  
長十二年遷府の時今の地へ移しぬ  
○高岳院ハとて甲州新府小なりて持念山教安寺  
と号しし香庭和尙府下増えしは乃中は移ししは

の菩提道場と爲して寺を出院と号す平家親を統

とすといひたりと云や

○喜日寺歌山田庄大永寺村庄ハ川村の地大永祿寺ハ古寺也

四柱なり川村の産也同修習寺時常大永七年再

建して柏悦道根和尚と中興第一祖と云和尚ハ和尙ハ

禪堂也此寺より菅家自益自誓の像とていと好ま

る天神の繪あり

○山田庄本々湯長母寺開山勅謚大圖國師ハ西和元年

十月十日寂して

○源賴義の裔負重と云ふ筑後赤松村赤松ハ住

甲冑と傳ふ是筑紫甲冑源伴之臣の先祖と云や

○或説大后タケウツ暴伐と云ふ者神功皇后乃御代始く甲

冑と傳ふと傳ふに暴伐ハ武周の一説又暴伐の子

孫大和國岩井村に任事國と云ふの甲冑成智一

源義家子敏也是大和岩井の祖と云ふ又一説小

治冷泉院御宇利和喜日院地は喜田の跡地と云

者甲冑成智と云ふ者喜田ハ開化天皇此後高古海

古世乃孫慈田といふ者又治田連姓を賜ふといひ

是今我春田乃先祖なりといはれり是らなる事を知

は

○藤下 東照文神幸此時音樂成奏するハ寛永七年

紀傳と説ふハ始に朝政の伶人我河和孫と云ふ



長壽寺  
より

窟同上人開祖と也や天王乃社を其北より

て一坊あり是れ藤坊といふ後或は天王坊と

又一院を常持坊といふ天王社に延喜十一年三月

十六日依勅命勸請と云く高福寺中織田信長

今川了俊と攻めし時無火の所を以て神社院を

皆焼く後よ是照上人の才子亮養上人

中村對馬守  
亮福智

亮上人の才子亮瑜意更の二院法勤院と再興して

信長は信龜尾山安養寺此縁託と傳ふ後亮養上人

因は法勤院を遷して之を法と甫坊といふ南坊の

地を今も西の坊といふ

○名古屋近府の附養文を養上人の地よりつを

安養寺天王坊の地よりつを天王坊今仁和寺の

院家にして院室或は天王院と稱す

○龜尾山安養寺法勤院再興縁記序曰當寺蓬

萊興之地景松風飢々彈琴寂上衆之道場桂月

團々堂軒威神和光垂鎮座

私云龜尾山は在本州愛智郡那古野庄若宮三所鎮

本座地也

金龜圓然愛靈尾龜尾山号由此者也

按龜尾古訓奈羅於今或稱奈奈於者其轉語

私曰磐田神宮寺龜頭山

今本津山  
カナカキナリ

那古野庄當北方

故稱龜尾





之拜殿もなほ多指も是の作しは是も亦西門の  
内遙那の洞少くして本社に那古那の若文少や  
あるなり

若文今ハ八幡と稱を奉同天皇と云々若文の系  
神といふと古後多ハ似たりは之なり

右垣より中一巻より上二巻より小川氏の花  
書の内竹田より信乃て剛峰と補ふ

○一日入書肆見一帖子名靈會曰鑑俗所謂過去  
帳也其終書數行字曰天會日鑑出矣或訝夫子  
歷代異子世紀通曰神后皇后只居拱政不即正  
位而稱十五世者不得允當故以應神直承仲哀

又齊明祿德乃以孝謙皇極重立之号不列世數退後  
堀川立九條院外光嚴等五主内南朝三皇神器北  
遷而後嗣正統於後小松是皆統元由日本通紀而記  
焉隨通紀行則見義事洋然義蹟謹識云々

信景梅々に皇統若此して又ハ允當と云々  
今此書を我玉史更録と云々偶記誦の者に  
是と云々亦略く昔焉と云々心成用ひ可なり  
正田の統と云々事なり義蹟ハ信景梅々之  
如ハ是と云々事なり

○山城國愛宕郡賀茂別雷神社名神大是上加茂社也  
祭神別雷命

同郡賀茂御祖神社二座並名神 是下加茂社也

健津之身命 伊賀古屋姫命

同郡鴨川合坐小社宅神社名神 是紀社也

玉依姫命

世人語りて玉依姫と建角身命と云ふ下加茂の大社と紀と云ふ賀茂皇を神ハ神姫の居事ありけしと語りけり山崩風云記并賀茂縁紀の旨ハ松尾小島大山明命行子流と云ふ事ハ御月乃夢と松尾に清ル利あり

順徳院所製

旧本記云松尾の神と用鳴漏神と云り風云記より詔丹波流矣とい合を及りて又別雷成ワケツチニ訓ハ賀茂山の別号と云はれワケツチ山ハ布祓山也本号好り

貴布祓社一座今社傳為三座曰高電曰別雷神

奥御前也三十二社註為船玉命与高電二座

又下加茂と云は貴命玉依姫と云ふ賀茂と瓊々杵と云ふ説注首の傳習に違ひ傳ふ也其風云記の説のとく玉依神といふて害はらふと云ふ草系卜定記ハ後世の傳也也何つかはる新日本記ハ賀茂建角身命ハ本和云云跪敬八咫鳥





神を産むまゝのまゝに産む所も亦世に於て我やたのまゝ  
其の細辛をて作るとも夢の如くは多くもあつて本  
州徳目よまはるぬれ也細辛と夢の類と云ふは  
我のいひしとて夢の家と付しとて撰ある人の夢の日  
夢をとりけしとて又新拾遺法系極院に神は神の  
まぬあひまゝの如にけしとては是も亦加曆に  
御着事此後夢の日如月の水几帳よけれる夢成  
御覧しとてはとたふとて也  
○智別朝然岳の淳和天皇天長二年二月十六日法法  
登山し求開拓の法と云へ虚空蔵の像と彫して  
せしれしとて

明皇水

住佛谷といふ所あり

笑蒼道人所製人天樂傳奇製曲技語曰曲之難  
有三律一也合調二也字句天然三也嘗為之語  
曰斗仄更須分上去兩平還要辨陰陽詩午詞曾  
有是乎又曰亦有二易云者可用襯語一也一折之  
中韻可重押二世方言俚語皆驅使三也是三者皆  
詩文所無而曲所有也然亦顧其用之何如未可草  
率如賓白何嘗可易須須理成章方可動聽豈皆  
市中游談乎

第一折關

西江月未上頭上青々何物眼前楚々誰人山川如

夢草如座花鳥偏能恨

第二折仙呂尤候韻

此點絳唇

小外扮小兒紅衣三髻 柳花雜  
扮日月凡塵隨上小外大笑介

千古千秋鳥飛

兔走乾生受塵却無休笑破黔羸口 盤坐案上大

笑三聲介

信景曰笑蒼髯夏為堂人天樂傳奇有上下二卷曲三

十六折祭未仲夏入書肆見之因少抄焉

○伊夜比古神者越後一宮也乃云天香山命神立產五百石

古歌の

いふとれあふよかしきそれふあひく日すく小鳥をとろ  
はあハ万葉集越中口首の伊に云

今士庶之内書天照太神守護八幡宮守護等之牌

多矣嗚呼二所我宗廟以此号掲早賤之户無忌憚是

也延喜神名式諱天照字録太神宮御府之書猶然

況士庶謾讀神号乎浮屠一習合祀官再效尤共賣

神為業愚俗不學子而不辨之可痛哉

右八位前梅雨窓書一冊乃内より抄出

○霜月

東漢魯相諱勅造孔廟祀器碑曰惟永壽二年青龍枉渚  
灘霜月之靈皇極之日河南京韓君追惟大吉云々

是十一月十リ

○白氏偶吟匹如身後有何事應向人間無所求匹讀作

譬和訓匹加身と云ふすと後毛意向と云ふと

てぬと云ふ事古原とありや

下野那須郡之毒を解毒せし僧言をよめ如神  
と云はれ我山乃破るに得と云く石と割裂て其言  
と云と彼信教を乞と破りし事なりふ  
○田原多代懼を偶人とてと云ふと云實修那りあ  
○山田と云ふ所の身其如く此秋とてぬれと云ふを  
と云ふと云れは言實以前をてつとぬしをてきり此信教  
のあはて名はくありありあ

○明世宗封我肥後州阿蘇山曰壽安鎮因之山夫我富  
士山以下各用名山多矣獨封阿蘇者何乎  
梅叔日本記十有以阿蘇為我國中岳之説故義滿特  
令請之然乎

○菅家新撰万葉をよめた字刻の記をよむとの多し

今略して書を中かくし

水上 ラミツ 別様 ウツタテ 酌 タムケ 早 トク 阪 タシカ 初夜 ヨヒ

不輸 サイク 蛻蟬 ウツセ 夜遊 ヨカレ 泛 フタ 服 キル 日夕 ヒヨク

城 シヤコ 花折 ハナサク 熾 ヲキ 化 カ 涌瀬 ツツキ 遊絲 カガリ

假添 ソカリ 聯貫 ツラ 幾 イ 詞 サカ 神女 カミメ 濱道 ハマミチ

夕三里 ツヨ 不覺 スギカチ

○日本僧家菩薩号七人

- 菅原寺行基菩薩 法然
- 招提寺大悲菩薩 覺盛
- 光泉寺忍性菩薩
- 大谷寺光照菩薩 法然
- 西大寺興聖菩薩 覺尊
- 大經寺大采菩薩 円澄

立政寺興正菩薩 知通

世外久遠より日蓮と菩薩と稱す但し詳初授の時

○<sup>真言</sup>密山嚴尊者 真教大昨 <sup>天台</sup>天海尊者 慈眼大昨

○浄土宗国師号四人 禅師号一人

通明国師 法然 善惠国師 證空

佛立惠照国師 黑谷 等照 普光觀智国師 增上 源峯

記主禅師 鎌倉光明良忠 諸書作記故名焉

○采卷 卷字也 六書正詁為平聲

十 定執切 廿 人計切 卅 廿也 卌 廿二也 卍 卅也 卌 卌也 卍 卌也

○天正十八年小糸の臣松岡尾浪守友を誅す其子たると  
孫をいませり其子に氏政と名けり仍て尾浪守清と依り

小糸氏も豊臣家と縁なく家そのいふも忠孝新從た  
馬助と名と喜むゆれも其父を誅討し其死又又父の  
謀逆成告の時其死又又父を誅す其時其死互降  
し城降す時其死後又氏直も從入敵も降り城を  
破して氏政も其死と死す其時其死も其死も其死  
り遺書と保とを恨あり其母は福あり其母は  
唐乃孝確り如く其母は其母を議せむ但し馬  
助年志少し其母を親り以て其母の母も其母  
先天下正十一年葉岡脇家此臣毛受其母其母の  
危をとりて其母を乞ひく其母を敵もむく不  
其母を其母も其母も其母も其母も其母も其母も

して曰老母を少立君迎て母を孝の可くは自家  
夫人義と好む神義と持てくは素意不違之是  
可孝なりとぞや志かど義を行ふはして回死を  
よと帝志に教ひ同く自令せり近代の兵士  
おとと衆あ人もや忠孝全くと信ずるよの  
毛受名中の去り彼大藤名成遊ひ利を慕ひ子  
孫の業を期して戦死する者をよと只今  
年代同くは語りし  
○度會延徳神皇御時小多を求むたはし海に中凡  
あらしり夕暮れ乃ひ悲鳴して筆をかまぬ  
かれ及ありと満とるく思ひす帝筆を正し  
放ち候ゆく是くは一生終る筆者のとそ何  
せとせりしり秘傳同義に自存せり  
○渡子善真記とて言一羽あらにやたれくも生類  
乃困ありとてそにんれ終る事あれといふ  
やそより乃所を改め一生せしめんハ本も衆人  
延徳天皇統道を明かにて天下に名残あれ  
を心とわく鳥書此幼少より老よあり  
皇一神の勇賢之志故とてあはく是は傳る  
○或回神物より付と書又物を入く物也す哉  
トシノミと云古より多事り予言 太神宮  
年中の事跡山伊賀利の神古又忠條の折敷に

して曰老母を少立君迎て母を孝の可くは自家  
夫人義と好む神義と持てくは素意不違之是  
可孝なりとぞや志かど義を行ふはして回死を  
よと帝志に教ひ同く自令せり近代の兵士  
おとと衆あ人もや忠孝全くと信ずるよの  
毛受名中の去り彼大藤名成遊ひ利を慕ひ子  
孫の業を期して戦死する者をよと只今  
年代同くは語りし  
○度會延徳神皇御時小多を求むたはし海に中凡  
あらしり夕暮れ乃ひ悲鳴して筆をかまぬ  
かれ及ありと満とるく思ひす帝筆を正し  
放ち候ゆく是くは一生終る筆者のとそ何  
せとせりしり秘傳同義に自存せり  
○渡子善真記とて言一羽あらにやたれくも生類  
乃困ありとてそにんれ終る事あれといふ  
やそより乃所を改め一生せしめんハ本も衆人  
延徳天皇統道を明かにて天下に名残あれ  
を心とわく鳥書此幼少より老よあり  
皇一神の勇賢之志故とてあはく是は傳る  
○或回神物より付と書又物を入く物也す哉  
トシノミと云古より多事り予言 太神宮  
年中の事跡山伊賀利の神古又忠條の折敷に

小石を入年の末と号しふた送る事あり是因種  
多岐時分れ今年年穀豊饒と頌し女祝し  
○この末と号して送る事ありこれと世儀も徳を祝  
しうきそとそふ侍る

○海部の中唐に志高ありありて長月古り此行侍  
乃たれは高直ちにありひ直下り我あり古書繪  
馬と見しは慶長元和乃此あるあり長尾法平  
吾高直とありは前園白秀次忠先考二位法平  
へいりしそまふ名は海りしむもよまれり  
忠ふ人もたれ世に折あり若く侍出ありてふは  
寺に古代志高あり侍る中に南無子に富士の経

りもるそまふ年代は妙寺中興地希ありそ寺傍にふ  
かり侍るあり侍るまふまふの侍て見侍りしは正暦元  
年八月廿八日の字に侍るまふ侍る近代志高弁諸  
地乃て海なるまふまふの侍て見侍りしは正暦元  
一際段の侍り侍るまふの侍て見侍りしは正暦元  
あやあやのまふとて侍る

○癸未乃秋徳利忠名那神社村より跡神ありと村に跋  
成侍つく上列高海とありし有日候てそふ返り我  
府地吏より侍りてふまふ九月廿六日吏人としそけ  
祭江古より有しや警判より出るといふなる神跡の  
と申扱ありていつれ志高侍りありとそふ侍る





圓堂場の由しあひそ田畑の色持りし太鼓と輕手  
笛とあそぶと一或ハ戲藝と成遊具成るあり  
素本流形一を伝ふ口手とほけ又と舞舞あり  
結ひ多し神乃とく持ありしせれりし於て  
流神の名入し由來氏忠書をいさし事にもあり  
ふやうにわかくもあそび流神記とありし事  
小しし流しを傳ふかと云ふ

○良忠上人ハ尾州富田人喚ふ融通念佛を云ふ  
りやうと云ふ唱しそや平曰前ハ我信しやう  
とは廻我所唱融會衆人衆人唱又通于我云今十  
念と授文を是融會言仏より佛ハ源を以て

古宗乃唱する事と云ふ良忠初めし一而代文てあり  
鈕と擊利を月空之心淨なり今嚴長信州善光  
寺乃佛像我座より來り於夕勤んを融會念佛  
是りけし言仏より十念授文せり  
○念佛に利をわかし本松尾の社新口なり明神年  
を別置之にありしなり松尾乃新口ハ半るくと  
是之稱れ事之証ハ是樂為にして事而之と一毎  
面より新口ハ形に付ての信稱の三傍處又と  
今之信し利を今地めりし形もむしに整りあり  
跡て証とし之信しそ万々未だありて本を考ふ  
事の多し

○京師少野園基ハ朝日寺最珍法師之

○清和帝貞觀八年七月涼殿太后疾僧相應禱而  
有應因最澄田仁賜大師号是後因大師号始

○薑と撒せむはむ程昔食膳にありし物也凡そを食  
せしむる盤盂にそのまゝ強し至終は其年之と儀

○氏にありし誠と文義明らうにありし物也  
信りしに名を氏に云々古書に記さるる今迄も

○知云と漢名氏に博識考す所ありし物也  
不臭故不丟夫雖齋亦不丟則常食之有薑可

○南史乃梁子野の傳に孔稚珪と稱し百川堂海

に乃王荆公の問小列貢の答に亦三子孫りか  
小孔子氏と勸めしむるを食とすむといふ事  
可笑のむ

○勢田社重脩

伏見院正應四年 應永十六年 義持公

長祿二年義政公 永正十四年 義晴公

元龜二年信長公 天正十九年 秀吉公

慶長五年神君 貞享十二年

大宮 八劔 氷上 高坐御子并御井

日割御子 上知麻麻 大福田 一神前

龍神 清水 左王 御田 内天神

南新宮

元禄五年造替

下知我麻 楠木

同六年

孫若御子 七子 今宮 東西十二社

氷上末社 麻草 八叙末社 八十社 同 徹社 高坐末社

鉦取社

同十六年九月

二名新宮 龍田 賀茂 金社 月社

山社 土社 浅間 王若宮 稻荷 山王

天神 以上大官末社

高坐 新宮 八叙 若宮 同 春日 同 住吉 氷上 常世 南新宮 居森

同年

神宮寺 号匡王院自此為真言宗

不動院 本在八 叙宮 愛染院 本三重 塔也

十月二日供養

○ 不動院小像を愛染院小像ハハ摺回奥院の中を之  
以院ハ弘仁九年空海建之普賢院の如く像ハ弘仁の天皇  
勅建三尊の像の中を之ハ一愛文乃此ハ勢利世儀を流下  
たらし山伏願之ハその後破壊シテ像を摩訶庵に遷す  
云々

○ 惟是流神各小伯父とは父に次ぐおらるる事不利之



方朔鐘山の香草を採りて懐りしまゝ毛鬚を以て  
一巻とて又懐の事なれども法華の信よき一巻

○老子云真人遊時各座蓮花之上云々是則尹令喜り傳  
小出の新氏佛像と蓮花載付りし方士の履迹りあり

ひくち魚

○劉羽と伽藍神とを向事 粟榆漫志小園玄長聽天  
師り受護法の陳妖僧智觀宋侍臣王欽若附會

私言至怪誕と云り 佛社通載小の附會の事あり  
地之清の古きりの冥好の事成信あり

○体画龜と摸必毛尾とあり是古今流る二歳の龜  
に十尾と生れといふり年久しき龜の事也又二種

毛龜といふあり是也

○世本云共鼓貨狄作舟黃帝二臣也白帖云古者觀  
落葉因以造舟

○元の元貞二年双燕柳湯佐り毫小巢くひし家入燈を  
挙て懸と照さしに雄燕翁と為て描小くしれり

雌燕悲鳴して青色の夕景とあり雛を哺し習ふ成  
成して後をいふ年唯又初まりしを有に巢くひり是

より毎に只初雛の事ありて因みに在りは年六冬  
見り人感して名づけて身懸といひると也又明

成化六年淮本漢人聖考の交遊をえし雛と捕り  
烹し雛をとりて死せしを臺に海陽の中へ投り  
て死せる漢人を其臺と悲しき臺と云てくはありし事

人号を移して列考とすべしと双極歳抄よき所なり  
免もろ

○川みくこといふ葉を河内玉錦郡那志村よ有化令  
に生せざばより而のよのり

○日本釀酒の始仁香又の名ハ須<sup>ス、コリ</sup>許理とふ人應神  
帝此時百濟より来りて傳りり由古事記小名たり

姓氏録よは兄曾保利弟曾保利二人韓国より来り  
酒を造り初りゆといり又韓國の鍛冶も世に代り

傳り卓素とふ人より始りるも韓<sup>キョノオフト</sup>鍛冶首と稱す姓  
續日記記あり物々しく卓素は後之人と度會延徳云

○或同撰田中社正小古より小祠ありよ小井輪形ありと  
あらず保楊貴妃乃石塔といひ一文字造型の対是成

廢より古記ありや曰撰田中録よ沙羅より小よ所墓  
一あり合ハ天神七代乃沙羅とふ説あり一ハ出雲

國氷川と素<sup>そ</sup>蓋島尊斬あり大地乃小舍利を埋めよ  
も墓ともふなりけ墓に於て多の石はありといり

世<sup>ホク</sup>同<sup>ホク</sup>より高祖の言より物よして楊貴妃といふを後  
人の所考とすなり

○奈末の秋神文寺佛圖重修あり延久元年統記空  
海以為大云と書深の至八舞ハ舞動の至と故云實

後よと一字ありて書深の小像及び一文字海の像を  
あそそ是を云の如代よ書八舞社内小一字あり

空海の像と武蔵院の像と  
 空海ウツクの像と武蔵院ムサシノイノの像と書きり古くはウツクと書つた小僧  
 武蔵院ムサシノイノの像と武蔵院ムサシノイノの像と神高寺カミタカの像は三定塔の  
 中よりなり一曰記は最澄モウショウの為此神東方ミナトに七佛シツブツ同神  
 とは此神高寺カミタカは武蔵院ムサシノイノと云々ヒト云々云々の信又ヒト云々云々の信以為大  
 空海ウツクの像と武蔵院ムサシノイノの像と書きり古くはウツクと書つた小僧  
 武蔵院ムサシノイノの像と武蔵院ムサシノイノの像と神高寺カミタカの像は三定塔の  
 中よりなり一曰記は最澄モウショウの為此神東方ミナトに七佛シツブツ同神  
 とは此神高寺カミタカは武蔵院ムサシノイノと云々ヒト云々云々の信又ヒト云々云々の信以為大  
 空海ウツクの像と武蔵院ムサシノイノの像と書きり古くはウツクと書つた小僧  
 武蔵院ムサシノイノの像と武蔵院ムサシノイノの像と神高寺カミタカの像は三定塔の  
 中よりなり一曰記は最澄モウショウの為此神東方ミナトに七佛シツブツ同神  
 とは此神高寺カミタカは武蔵院ムサシノイノと云々ヒト云々云々の信又ヒト云々云々の信以為大

○同記大宮五所次第曰一素盞鳥尊二柳稻田媛三日本  
 武尊四宮酢媛五稻種公イナシノキミ

註梅小社傳第一天照太神或姫神 第二素盞鳥尊と云々  
 註は素盞鳥尊ニギハヤヒの延久記誠は素盞鳥尊ニギハヤヒ乃  
 配位ハ小縁乃申れあり夫姫神メノカミと云々多クハ天照  
 太神ニギハヤヒと云々社多ク地より一社にありて神記と  
 知る人小縁尊ニギハヤヒ可なり  
 ○神名式ヒカミ火ヒカミ上アミ姉アミ子コ神社ニギハヤヒと云々ホノカミア子コゴと和訓  
 考ニギハヤヒ如ニギハヤヒ小コ今イマ社ヤ家カヒカミヒカミと解ハ就ニギハヤヒれニギハヤヒるニギハヤヒ予コ云  
 西ニギハヤヒ和ニギハヤヒ訓ニギハヤヒ知ニギハヤヒりニギハヤヒと云々藤系村フジノキムラ相ニギハヤヒ傳ニギハヤヒ同ニギハヤヒの  
 記ニギハヤヒ小コ目メ本ホン武タケ尊ノミコ乃ニギハヤヒ甲斐カヒ院イノ乃ニギハヤヒ宮ミヤ座ザ坐カしカてカ宮ミヤ座ザ乃ニギハヤヒ成ナリ  
 意ニギハヤヒ何ニギハヤヒ由ユ知ニギハヤヒ何ニギハヤヒ多タ比ヒ加カ弥ミ阿ア祇キ古コと云  
 是ニギハヤヒ成ナリ以ニギハヤヒてニギハヤヒ是ニギハヤヒれニギハヤヒハニギハヤヒひニギハヤヒりニギハヤヒと云々古コ語コトと云々

○正應六年六月十六日託宣記熊野田正一位大神宮  
とあり

○仁明帝大政官符野田祚体五体圖造云云此地  
仲の像より一彦并東老守什物に古き石智  
乃繪あり野田乃正体佛と云り又智の外文珠  
地藏及勅毘沙門の像あり是ハ源を又大破八割  
高倉此中地佛と云り以て百ハ毘厨司の筆ありと云  
これ仁の帝此時ありと云

○甲州より日蓮宗と傳ふ宗乃法福ハ天文二十二年  
十二月二日原美濃守虎種法良を削りて日蓮  
宗一足年にとりて刑と云ふと馬場氏初月巻  
取取富之と云ふと合せ小田原と云ふ

大ハ為多同掃の也なり抄出す

○董仲舒曰天者群物之祖也 對賢 良策  
伏按我國史以天御中主神為万物之祖者尤有味也

○府謂宝藏貨賄之處庫謂車馬兵甲之處左傳疏

○兼茂の所乃ありと云る二月菊とてあそふ書又加  
ハ事茂事ありと云るあり用くも兼茂ありあそは  
言兼茂のそと云る中にも云る一ハ内れと秋菊茂を  
乃そもそ似はるは所あり詠きも秋の志を  
はか

○然此新宮毎九月神樂を形よのせなりと云す



次乃躬小唐兒とて幼思に錦繡の衣成るを紙筆  
に山多尾尾をわして載そそ次ハ神人多くありて  
鴻皇りこ号し河船流成漕かへり丹生山に神樂を  
しほし十月十六日に海在名事ありしを唐兒は  
かしく海りりしとす

○明人陳元贊謁拜敬公寢陵 寶文二年 寄跡東溟教

○十春感公升斗活窮鱗幾年凶劇瞻無自今日

玄宮拜有因驥困監車憐伯樂龍埋神劍辨豊城

白顔一滴酹知淚 銘德千秋永不磷自注云城音

申古韻通用唐李適詩化工妙照洛陽春柳如絲

飛花散滿城

○市玄し乙亥流膝月但利君叙爵のゆらうと入

ませのふ帯便よ 渡後よまのり行りし古松峯に

老ひ曉又ふのり小喰れ喜流氷と解る新雪病

○世流ふいと流るふそそ 海よけ山乃並り

池尾張之神社臨りまそ故尾尾山とすしや也

先公お母しちそ中河れハ其室に靈櫃と柱を免

海つるし道令ありし昔成勢流船よ豊令命成

当國乃玉遠に定めハ天武乃しり字小子初連鉏

鉤と号しとあふり代々顯任の号物と向せん

し又小北之乃攝政事頼と尾流傍に封し清

慎と謚ありし後小 敬公始て封謚と稱をり

○昔我國任太政大臣而執終之臣多有封謚

史フナ 文志公 良房 美濃 忠仁公 基經 越前 昭宣公 忠平 信濃 貞信公

實賴 尾張 清信公 伊尹 三河 謙徳公 兼通 遠江 忠義公 賴忠 駿河 康義公

為光 相模 恒徳公 公季 甲斐 仁義公

以外謚号代終不名后於多一 中世より一 治暦者不入謚  
封の事やむ 寺院乃号と稱する 東三條攝政兼左大臣  
治れり 法皇院と号し

○后宮門院号ハ後一條院の母后彰子と上東門院と号  
きしり 彰子御よこれより 先皇号后治子為師の後  
東三條院と号し 事あり

○神皇正統記云上古ハ勲功あれハとて 官位ハ進むと

ありし事常の左位者上に勲位とふ事と重一等より  
十二等よりあり 官位の人られども勲功高く一等に  
あれハ正三位乃下位之位乃上に列す。一と云ふ又ハ  
位ある人は或兼さる事あり人として云ふ  
按てハ官位令才一乃義解小治系云々なり 夫位  
位ハ帝乃長樞機天下乃權衡なりを其人或選ハ  
授きし事と事なりハ事世にいつて 官位乃ある  
職階成つ人と選ふと如く 只時君の私よこれ權  
位乃事小前仍る事 又謬舉戸録の如しり也  
るなり 勲位ハ唐の制よりあり 我朝右位の  
みどりハ一あり 一 隆倉將軍 武時より 系



是成象形也信く代々善き一統の皇  
 帝破陳樂是之太曲忠よ信絶き少也今道  
 洞の教手破陳系を一人乃齊なり我 漢  
 公朝迄の樂友小信し伶人なり太曲と習し  
 ちめふ 公費して後教手破陳系は譜ありと  
 信し物の善し今之玉に信ありと習し  
 信し名云興絶乃神志も志高く禮樂も信あり  
 〇上は信ありしき信ふゆりあり世代ありせよ  
 幸いともなりあり

〇名の凡九拜と書と九夜抄なる事一也と或人言  
 是の時因禮九拜とて善信し一也後武藏若

〇一尋信りしに因禮乃九拜と書は信あり名九  
 〇中以書ハ凡あはれに朝廷信受養交はりの日信屋  
 〇天去成信しなる小まそた太在信くた太凡地信  
 〇二乃去て一度信しなる是合て九夜信を九  
 信あり礼とふ極を重なり事とともふ信くと事付  
 〇信りき我名を信信りハ知れ信り凡を道あり  
 〇信りしを信信りしと云ふにあり信信りしと  
 〇信り信つましむに信あり  
 〇陽病則陰勝故馬疾則卧陰病則陽勝故牛疾則  
 立造化權輿ニ出たり信信馬ハ左なり  
 〇金翅鳥出符子正法念經採之為説字

○石燕

湘中記云形似蚌小者石也

○三足鳥

瑞應圖云王者慈孝天地則至云々

○正鵠の正二鵠鳥の事一は一海一に一潜一確一類書六

○亀壽万年 出述異記

○三月三日ハ湖干此時之として標列位吉此後をわく之  
もく之色の日海色は遊ぶハ巳の日夜長遺風名度

の書凡ハ湖干此事はとて人あれと潜確類書百

十六小三月三日湖畫といハ異邦にも於みあり

○鴨鵝螺 出南川異物志

○人面獸心 出阮籍猕猴賦

○伊勢西宮造望乃材木出世ハ紀伊木太杉山よりわたり

竹りし元祿辰原松入をり始りしを材木と名ふるより

て今もハ信濃木若山より長材と名り竹より木

だけ此命あり

○書院玄園の如きハ我木直と名りし一室向古方窓の時

ふ山の祿院書院玄室と名り時君好く柳書院に

作れし今も武家乃如きと名り 書院とて佛書院  
舎にありは吾邦信

卓に香花と名り 祿林乃如きと名り 書院とて佛書院  
舎にありは吾邦信

今祿刺年此如小菅殿の一間と移ハ観音の像と掛

中央の卓に香花と名り 家の祿年と名りしとて

一由山の祿迦ハ成道果の中よりと名りしと

信濃も名り

○ 椽ハシ 東澄トクより多くる由源氏ヤシなり。それ差示あれハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク

○ 神代卷踏堅庭ツツミ 源氏タケナヒよりそれ差示れハク



唐乃文小あり平海邊をてるに  
 可也世貴水とて好れて祝めり時ハ敵とぬけたる  
 二より敵入半なり古人物とる半洋ありとる  
 事多し難と給に似て對面とつるもはくさす常螺の  
 扁なる物少く蓋なりと云ハ可あり又相思子と海槎餘隊  
 ありに螺のまゝに中交し右に好しとつるとも洋  
 相思子の醋とめて盤旋するハ小嬴の蓋なり崔禹錫  
 の食經小白玉此蓋なりとつるより和名にのせたる是レ  
 内ハカ乃少しとるぬ國の人見てハ中交と名見之とて  
 つつとる物にいつて知る事成らるるあれは  
 何如海りすくをりす

○新撰万葉女信是とあるハあまの御事  
 ○正月七日朝家青馬節會共始ハ公事根原より伝  
 月令の倉龍といつてもまゝのゆへに民間書約といふ  
 祝辭より成事なる事より記すといふ人あり按きた  
 書約の辭ハ蚕事と祝する事なり凡蚕と馬とを也と  
 同くする事同様の注も之馬化して蚕と好り  
 故事も傳る所ハ古川にけりる事ハ我虎の海無歌  
 又古川の名も傳る物ハ虎張八丈と織ハ半ハ也也  
 ハとと海無歌なりハ八丈織ハ半ハ也也  
 たり高砂ハ移りたる也  
 同云万歳ハ遠處の祝辭多道ハ田事成祝ハ書約ハ蚕



素王とゆふは一人衣食任乃云成まるとすなり  
 年終初是と正ゆきて具を信しゆふと云を信  
 命を保ち衣成心てまを信し家に居て而も又おま  
 是人の生とまふ道之王政もまを治まると孝弟  
 忠信を教ふゆふに言に八珍方丈忠とわけをなす  
 是をく錦綉を信しひて於まを令殿由樓よ居あしと  
 せりる彌修の心よりあひりてまを信と極人とまを信  
 リ臣改の阿房の中まの民の恨成つと隨まの道樓已乞  
 の内よりてまを信と極人とまを信と極人とまを信  
 してゆふまを信と極人とまを信と極人とまを信と  
 かなしゆふ人のまを信と極人とまを信と極人とまを信と

○穢王と云はれぬとせしむるゆふ人のありと云

○今朝廷稽首二月あり民同少も麻の初禱と云

て年の始え稽と年と云

○易曰道筮乾鑿讀易曰三折三減論語識韋編三絶銀素王

之功曰素功梅福讀書眼曰月眼山谷公言曰誦言高后盡言高后

曰索言許后違道之辨曰詭辨石頭失言曰墜言漢書和韻

之言曰諧語東方朔喜飛揚誹謗之語曰飛語灌夫一言

必信曰忌然諾被謗曰橫被口語揚惲

○神武紀向日字釋日本記秘訓ヒシカシニムカフト訓せり

○按るに日向ハ於詔東向ヒカシムガヒノ轉ヒウガシ

○梨子のやうと後、倭語よあそり、素子をりて訓

○今民家紡車につよたる俗語楯ウモにウモこと云とのる

何の字も曰輪鼓の字なり、本館相撲の記よあり

細腰鼓のやうと不楯ウモに付る布乃とのかきり似たる故

は名ありハ楯或は紡鐘とかりり

○筆法十三法小十の外トイキこと不斗為中と斗ト

筆漢よたどハ本館格布得新羅翠十二條ノ筆

の名甲乙丙丁戊己庚辛壬癸天地とあり、天地ハ筆

此斗乃中のこと

○百寮訓要抄ハ後福光院園白良基依康苑院前太政

大臣之請所述也

○卜部家唯一と移を傳事とと法真唯有一葉の文可

とれりと名法要集に後一條院震筆に之唯一乃

二字残書のふととり物ハ林道春後書を物で兼

延り他小あしと云り按るに孝徳記ハ帝道唯

一乃詔ありト氏ふれと忘れあり

○兼延ハ神宝圖一卷行法の意とのそ是男合家の

為り

○顯宗紀イエホギ室壽曰築ツイタニル立柱者此家長御心之鎮也云々

○初穂延喜祈年祭祝詞

孝徳紀盟言曰今共瀝心血今人そとて託語血判の

○事久しき事なり是ハ赤心乃詔故ハ血を誠と訓たり東鑑  
○小慈流血到のときく流血を以慈流乃失とたり今  
○指血を花押小慈をそゆとみ如史記陳除何ハ張敖  
○留其指虫血梅索隱是喪至誠為約誓也とされ小橋  
○但佛書ハ血為墨の云々

○尾張一宮相殿有大龍姫龍二神オホタツシメタツ梅多りに三元五大傳神

○妙經習合家所作汝大彦龍王者伊弉諾尊尊變作也汝大姫龍

王者伊弉册尊尊變作也云々是佛書龍王乃高説小逆ハ家  
神ハ小逆を哀哉

○蛭見舊事紀云水蛭見日本紀省水字ハ

○梅多りに云々を流ハ梅多小云々のこと云々

○蛭を蛭と蝶ハと化ハたりと云々蛭の字ハ

○蛭なり今同言小蛭を其ハ家蛭成云び云々

○時々流為のせ川ハ流を云々蛭見ハ成事ハ

○流にのせ流ハ流を云々と往古ハ流儀ハ

○子ハ梅小入たり云々を云々す云々神代名卷

○梅ハ上古ハ蛭多ク云々今本成云ハ何流

○とあるハ何云ハ云々ハ

○正月ハ流内由り云々何の月也と云々

○梅多りに三角拍小酒ミツノカネと云々云々大掌舎式ハ

○見あり又解たりと云々也梅多紙小十二月梅

○梅多りの食物ハと云々又ハ梅多紙ハ





